

関読する文体への疑問—副田義也『日本文化試論—
ベネディクト「菊と刀」を読む—」を評す

橋爪大三郎

東京工業大学の橋爪です。今日用意してきたのは小さな半ペラのレジュメ一枚ですが、これに従って報告します。

ルース・ベネディクトの『菊と刀』という本については、いまさら言うまでもないでしょう。その『菊と刀』に関して、副田氏が『日本文化試論』という本を書きました。この内容についてここで詳しく紹介する必要もないと思うので、そのさきをのべますと、私はこの本を読んでどこか異和感を持ちました。その異和感については、お手元の『大会報告要旨』のなかに書いてあるので繰り返しません。その異和感の内容を突きつめてみると『菊と刀』がどういいう書物であるかに関して、副田氏と私とはまるきり理解が違っているらしいという点に帰着します。

私は、この書物をどう理解したのだろうか。報告要旨をまとめた時点では異和感ばかりを書き、私の理解のほうを整理してのべなかつたのは失礼なことだったと思うのですが、ここで私は理解をのべて、そのうえで副田氏との違いを明らかにしていく、それも書評のひとつのあり方であろうと思います。そこで私の理解をのべますと、まず『菊と刀』という書物の性格ですが、普通これは日本文化論の「古典」と考えられています。たしかにそう読んでもかまわない。しかし、そのテキストの出来上がりを見てみると、これは大急

ということになった。そうしてまとめられたのではないかというものが私の想像です。ですから、この研究は、学術的な体裁をとっており、発表された段階ではそういうふうな体裁に仕上がっています。第一義的には実践的な課題を持っていた。それは要するに、占領政策をどうしたら有効に推進できるか、という課題です。そのためには、降伏当時、一九四五年前後の日本人の信念と行動体系を、系統的に理解する確かな情報を与える、これに尽きるわけです。多岐にわたる研究は、要するにそこに帰着する。

これはいわゆる「組織神学」的努力ではないか。組織神学 (systematic theology) というのは、信仰を制度化するためのものです。いろいろな原理を挙げて価値のあいだの序列をつけ、ひとつの神学体系を組み立てる。キリスト教は、ユダヤ教やイスラム教に比べてこういう面が立ち遅れていたもので、こういう神学の部門があるわけなんですけれども、同じような考え方で、日本人が仮にひとつのまとまった価値体系を信じていたとしたならば、それをどういいうふうな組織神学に書き出せるのだろうかという努力を、暗黙のうちにやっているという理解できる。

占領するのはアメリカ軍ですから、アメリカが前提としている価値観からどのようにずれているかが記述できれば、占領目的は達せられる。その点では、かなり大きっぱです。比較の対象となっているのはアメリカで前提されている価値観で、そこから見ると日本は一見奇異に見える。しかし、その矛盾は、実は好意的に解釈する余地もある。こういうふうな構成になっているんですね。

さて、このような『菊と刀』という書物ですが、一番大きく評価

ぎのやつつけ仕事なのです。古典とは、それを専門に研究している研究者が全力で数十年にわたって研究し、これ以上磨き上げられないような形でテキストを確定した、後輩の学者がそれを繰り返し読んでいく、というものでなければなりません。しかし、『菊と刀』はそういう性質の書物ではありません。ベネディクトがこの仕事を引き受けたのは『菊と刀』の緒言によると、一九九四年で、太平洋戦争もそろそろ終盤にさしかかる時期で、(もちろんそれ以前にも何かほかの仕事で係わっていた可能性もありますが) ずっと以前から準備をしていたものではない。それをまとめた『菊と刀』の出版はわずか二年後の、一九四六年です。戦争が始まると、戦時情報部の極東部というところで仕事が始まり、人類学者を含む大勢の学者が研究に参加していたわけですが、その一員として、敵国研究として日本の研究を行っていた。そこで彼女も、従来の業績や考え方を「文化の型」を生かして、日系米人の強制収容所での聞き取り調査をしたり、さまざまなパンフレットや日記類を資料に使用したりして、急いでまとめたという性格のもので、『菊と刀』が本としてまとまるに至った経緯は書いてないからわからないんですが、私は想像するに、この種の軍の仕事は秘密の任務を持っていますから、調査が一段落するごとにテクニカルレポートを軍の上層部に次々あげていったであろう。戦争はいつ終わるかわからないわけですから、毎月のようにそういうものを書いていたに違いない。これは当然公表されないわけですね。こうしたレポートの原稿は本人の手元に残っていても、そのままの形では公表できないので、戦争も終わったことだしそれを手直しして一般向けの書物に書きなおそう

できる点は、その大づかみな展開(論理性)であると思います。細かく見ていけば、逆にアラがどんどん見えてくるわけです。アラというのは、ベネディクト本人は日本研究の専門家ではなかったか、時間を急いだためにいろいろ齟齬が目立つとか、そういう問題ですが、そういう細かな点にかかわらずこの書物の全体が見えない。例をあげましょう。子ども向けの3D何とかという絵本を本屋さんで売っています。見たところただのシマシマの模様でも見えないのですが、焦点を本の裏側に合わせますとシマシマ模様のなかから絵や文字が浮かびあがってくるという、そういう絵本です。『菊と刀』もよく似ていて、細かいところはかなり支離滅裂に見える記述が沢山あるわけですが、焦点をずらして、全体はどうなっているかというふうに見ると、いまのべたようなテキストの構成の仕方が浮かびあがってくる。

ところが副田さんの『日本文化試論』はちょうどその逆の読み方になっていて、『菊と刀』をいわゆる古典のテキスト、磨きぬかれたテキストであるという想定の下に、その断片を個別に研究している。「何頁で参照されている原典はこれこれに違いない」とか、「ここは別の誰その考え方とこう違う」とかいうふうなことを逐一検証するという性格の書物になっている。まるでトンチンカンなのです。

つぎに、レジュメの後半ですが、『菊と刀』はどこまで成功したのか、を考えてみたい。

『菊と刀』は公刊される段階で啓蒙書としての体裁をとらざるをえなくなりました。そこで本書の性格は、文化人類学者が行なった

学術的研究という側面、アメリカ人に向けて書かれた敵国日本についての啓蒙書という側面、この両方をあわせ持った性格になりま。このような性格の本、特にアメリカ人向けの啓蒙書を、日本人が教養書なり啓蒙書として読むということには問題がある。どうい問題かという、アメリカ人の場合、自国の文化については説明の必要がない。日本の文化について説明する必要があるんですね。しかし、われわれの場合、アメリカ人の価値体系を自らのものとして十分理解しているわけではない。日本の文化についてはある程度理解している、それがどういふふうに説明されているか、なるほど見方がだいぶ違うなあ、という読み方になるわけですね。アメリカ人であれば、自分たちの価値体系をかなり組織されたものとして意識していますから。いまみたいな読み方になる以外ないのですが、日本人の場合、そうした自分の読み方の偏りが自覚されにくいのではないかと思います。

さて、この書物は、文化人類学という学問の科学性、実証性を手段、方法として使っているわけですが、それはどういう意味をもつでしょうか。当時のアメリカ人は、日本人はまったく理解できない不合理な思考や行動をする存在だと考えがちだったわけですが、本書は、それを「もうひとつの合理性」として理解していくことも可能であるということを示す、その説得の手段となっているというふうに考えられます。

ベネディクトが文化人類学者として日本文化にふるまう態度は、彼女が今までとってきた態度の延長上にあります。印象的なところをいくつか挙げておけば、天皇を太平洋諸島の「神聖王」と類似し恩には、天皇の恩や親の恩などがあるんですが、天皇の与える恩や親の与える恩に対応して、それに応える責務(債務)が存在する。責務には、有限のもの、無限のものという作用素もあって、義理や義務へと分節されています。責務はさらに、誰に対するものかで分類されて忠と孝に分かれ、義理に対するものとしては恥という概念がある。また、それは別に、誠実であるという作用素もあって、これはそれぞれの道徳項目に対する羈束(べきじょう)演算子として働いている。こうして、日本の価値体系の前提となる要素を多く取り出してきて、それらを整合的に配列していくという努力を、各章を通じてやっているのです。

ここで結果として、日本の価値体系がこの書物のなかでうまく描かれたかどうかという点なんですけれども、彼女はやや矛盾したことを言っています。一方で、日本人自身はこうした価値をひとつの体系として理解することに成功していないという判断があります。例えば彼らは「人間の義務の全体」はあたかも地図の上の諸地域のように明確に区別された幾つかの部分に分けられているように考えている。…人生は「忠の世界」「孝の世界」「義理の世界」「仁の世界」「人情の世界」、その他なお多くの世界から成り立っている、まあばらばらであると、一口で言っているわけです。これを別のところでは、*日本*の道徳の原子論的状态(原文ではatomism)とよんでいる。さまざまな価値が、序列づけられ体系づけられないまま、ばらばらに存在していて、ばらばらな局面で日本人の行動や信条を支配していると理解しています。アトミズムが日本の道徳の、原初的狀態である。これが日本文化の型というふうに見られてい

ていると指摘するところとか、育児の方法が「共感呪術」にもとづくという記述、とかがあって、要するに日本の文化は資本主義文化ではあっても、未開な文化と同じ方法論によって研究している主張しているわけです。こういう態度によって、日本人はいたく傷つけられるかもしれません、そういう距離感から書かれているわけです。こういう文化人類学という学問の持つ、文化的体系、価値体系に対する距離感(客観性)が、日本という社会を適度な単純さによって抽出するのに有利なのです。もしこれを、日本学研究の専門家のような密度で書いていたら、とても短時間でここまで体系的な書物を書ききれるわけがない。そういう意味で文化人類学は、適度に荒っぽい学問だった。

この文化人類学によって、どのように日本が再構成されたか。彼女は繰り返し日本人の信念・行動体系の全体を再構成しようとしていることを書物のなかでのべています。例えば二九一頁(文庫版)では、日本人が国民全体として抱いている人生に対する仮定を取り出そうとしています。仮定とはassumptionの訳語で前提という意味です。ひとつの価値体系、それはいくつもの証明されない価値前提に立っていると想定されているわけですが、それは明らかに事実としてあるわけですね。で、仮定(前提)と言うからには、そこから論理的に導かれる結論があるわけです。ここから彼女は、日本文化の前提、仮定を押さえれば、日本文化を合理的に全体を理解できるという想定の下に、仕事をしているということがわかります。その点は一七頁あたりに書いているわけですが、結局取り出されてきたのは、「恩」という仮説構成体です。

もしそうだとしたならば、彼女は、いくつもの前提から日本文化を合理的な体系として理解しようとしたことに失敗してしまうことにもなりかねないんですけれど、いっぽう別なところではこんなようなことも言っている。特に明治維新の分析に続くところなんですけれども、天皇制に関して「忠」を地図の上の単なるひとつの領域ではなくて、道徳のアーチの要石にしようとした、と書いてあります。要石というのは、キリスト教の道徳に特徴的な言葉でしょうけれども、要するにこの原子論的状态ではどうしようもないので、日本の近代化のために天皇に対する忠を政策上強調して、日本人の価値観をひとつの整合的な体系(道徳のアーチ)にまとめあげようとした。そうして、そのような価値観を日本人全体に教育した、その教育の効果が一九四五年の段階では日本人を支配していたという判断も下しているわけです。その例として挙げられているのは、軍人勅諭や教育勅語で、これはトローラーに相当するものであると書かれている。トローラーとはご承知のようにモーゼ五書、つまり旧約聖書の前半の五つの部分で、ユダヤ教やキリスト教で神聖なテキストとされているものですけれども、そういう神聖テキストに相当するものが、軍人勅諭や教育勅語であると説明されています。これは、古事記でも日本書紀でもないわけで、明治天皇がある時期に下した歴史的文書なのですが、そういうものが機能的に神聖テキストと同じになっているという指摘は、近代になって日本の価値体系が合理的に再編されざるをえなかったという歴史的事実に注目していると考えられる。

そうだとすると、ベネディクトの分析は二段階になっていること

になる。日本文化のもともとの型は価値のアトミズム、原子論的状態であった。しかし戦前の天皇制、一九四五年の段階での日本は、別な価値体系をもった西欧と接触した結果、それに適応して、教育を再編成し、その産物として、ヒエラルキー(階層的秩序)、忠というものを強調する文化体系に変質を遂げていく。その結果、合理的な価値体系とほぼ同じように機能するもうひとつの秩序をこしらえた。こういう二段階の分析になっていると考えられるわけです。

これは分析としてはまあまあ成功しているのではないかと、私は思います。『菊と刀』が日本に紹介されたときに、いろんな反応があったわけですが、そのなかで鶴見和子さんが否定的な評価を下してベネディクトの分析は歴史的背景を無視しているとか、戦前の支配階級のイデオロギーによって日本人全体を代表させているとか、いろんなバイアスを挙げて、分析の効力に疑問を呈しました。そういう側面は無視できないかもしれないにしても、この『菊と刀』という書物はとりあえず、アメリカの占領政策に貢献できればよかったわけだからそれで十分だったのであって、この書物は成功していると考えられる。

ベネディクトの分析が正しいとすると、一九四五年以後の日本の状態がどうなっていくかが予測できるわけですけど、戦前日本の、忠、ヒエラルキーを中心にした価値体系、合理性はみせかけのものですから、敗戦によってそのヒエラルキーが崩れたのであれば、もとの価値のアトミズムに舞い戻るであろうと予測される。戦後は実際、そのような道筋を進んだのではないかと考えられるわけです。そうだとするならば、『菊と刀』の分析はその粗っぽさにもかかわら

な全体性・論理性

*しかし『日本文化試論』は、分析のサイズが細かすぎ(例:各章の断片的な紹介)、こうした全体性・論理性に注意が向いていない。

*ベネディクトの集めたデータが偏っていたり、つまらない本を援用したり、日本文化に通じていなかったりするのは当たり前で、そんなことを指摘しても始まらない。

二 『菊と刀』は、どこまで成功したのか

(三) 本書の性格は、①文化人類学の学術研究×②アメリカ人を対象にした啓蒙書:半々

*アメリカの価値観は自明のものとして、暗黙の前提になっている。↑日本の読者に困難

*文化人類学の科学性、実証性は、アメリカ人が、日本人を「もうひとつの合理性」として理解する場合の、説得の手段。(訳八一頁) 太平洋諸島との類比、二九六頁:共感呪術)

*そうした距離感が、高文化の国・日本社会の複雑性を、適度な単純さで描くのには有用

(四) 再構成の対象:「日本人が国民全体として抱いている、人生に対する仮定」訳二九一頁

前提・仮定を押さえれば、全体が理解できる↓合理的・演繹的な構成を想定(訳一七頁)

*恩(天皇の) / 義理(有限の債務) ↑恥 / 誠実(幕僚操作子)

ず、おおむね妥当であったと評価できると思います。

私はだいたいこんなふうにしたんだのですけれども、こういうふうな考え方がほとんど副田さんの書物のなかに見られなかったもので、私はあまり感心しなかったんです。他の見方が示されているのであれば、それはそれで十分検討できるのですけれど、そうではなくて、コメントリーなんですね。コメントリーは、精密で難解なテキストに對するものなら評価できるんですが、『菊と刀』は要するに粗っぽい書物ですから、力を入れればいれるほどかえって全体がわからなくなる。エネルギーがもったいないんじゃないかと思えます。

当日配布されたレジュメ

一 『日本文化試論』はどこで、勘違いをしているか

(一) ベネディクト『菊と刀』は、おお急ぎのやつつけ仕事である。↓精密でなくて当然

*アメリカ・戦時情報局(極東部)の、敵国研究の一貫
公刊された『菊と刀』に先立つ非公開のペーバが、軍上層部に提出されたであろう。

*研究の目的は、当時の日本人の信念⇨行動体系を再構成し、占領政策に役立てること(プラクティカルな課題⇨組織神学のsemantic theologyの努力)

占領するのはアメリカだから、アメリカの価値体系との差異が記述できればよい。

(二) ベネディクト『菊と刀』でもっとも評価できるのは、大づかみ

親の) 義務(無限の債務) (忠・孝

*「彼らは「人間の義務の全体」は、あたかも地図の上の諸地域のよように、明確に区別された幾つかの部分に分けられているように考えている。…人生は「忠の世界」「孝の世界」「義理の世界」「仁の世界」「人情の世界」、その他なお多くの世界から成り立っている」訳二三四頁 (「日本の道徳の原子論的状态」訳二四〇頁) (日本文化の型)

*↓天皇制:「彼らは「忠」を、地図の上の単なる一つの領域ではなくて、道徳のアーチの要石にしようとした」訳二四〇頁 『軍人勅諭』『教育勅語』(トローラー)

(五) ベネディクトの分析では、戦前の天皇制は、西欧に対する二次適応(教育)の産物であったことになる ex. 階層的秩序の強調

*ベネディクトの分析は歴史的背景を無視している、支配階級のイデオロギーによって、日本人全体を代表させている。(鶴見和子)といった批判は、あたらない。

*その分析を延長すると、戦後の日本が「道徳の原子論」に舞い戻ること、容易に予測できる。実際、事態はそうに進んだのではないだろうか。

〔参考文献〕

島田裕巳 一九九四 「恥の文化としての日本」『菊と刀』への反発と受容」『日本という妄想』…三九五-三三、日本評論社。